

Un.C.自体は、キッチンを中心に環境づくりがされているのが特徴で、その周辺で仕事や打合せをしている風景もみられるなど、カジュアルな働き方が日常になっている。その他にも、コミュニティマネージャーという、シェアオフィス内の利用者同士のコミュニケーションをマネジメントする専門の社員を実験的に設置したり、ヨガのクラスを企画するなど、常に進化することを意識して作り続けている。

### 講演3「はたらく場において『つながる』こと、『はなれる』こと」

大橋一隆(OpenA)

オフィスに対するアイデアの着想から、実際に参考にしたオフィスの様子や経営者へのインタビュー、実践までの流れが話された。

「はたらく」の意味が変化してきている(Labor→Work→Play)と考えられることや、社員のライフサポートをする「リビング化したオフィス」が必要になってきていること等が示された。

オフィスキッチンのデザインは、複数人が利用できるような幅を意識していること、目線の交差をコントロールするために高低差を設けている(ホスト役とゲスト役を自然と生み出す)こと等を意識している。また、産業廃棄物を再利用した家具を使用することで、訪問者との会話の種を作っている。

「はなれる」は新しいオフィスには重要な要素であり、ミーティングスペースを少し離れた場所に配置することで、「はなれる」ことを可能にしている。

### 質疑・ディスカッション

3名のパネリストに佐野(前掲)が加わって行った。会場シェアオフィスに関する情報についての質問や、「つながり方」や「はなれ方」、新しいはたらく場の可能性についての議論が広がった。

Un.C.における「家の延長がオフィス」という考え方や、各場所がどの程度使われているかという点についての質問には、3食をオフィスで過ごす人もいたり、公園のように自分の気分に合わせて場所を見つけられるようなオフィスを目指していること、キッチンも最初はあまりうまく使われていなかったが、一年くらい経って、ワーカーが自発的に色々なことをするようになった過程が説明された。

コミュニティマネージャーの役割や実際の活動については、新規入居者と最初にコミュニケーションを取ったり、プロジェクトの盛り上げ役を買って出たり、入居者同士の問題があった時に対応したりといった取り組みをしていると述べられた。

また、「はなれる」ための環境づくりについての質疑については、「つ



研究会の様子

ながっている」環境下では、無意識に周囲の目を気にしてしまっていて、気持ちの上でも「はなれる」ということが難しいこと、逆に図書館で話してはいけない空気のように、空気感を育て上げることが重要であること等が答えられた。

最後に、新しいオフィスの在り方について、これまでは欧米のオフィスを参考にしてきた部分が大きかったが、日本ならではのオフィス像があるのではないかと、ひとつには「食」があり、コミュニケーションのきっかけになると考えられること、また、ワーカーにはそれぞれにモードの切り替え方があり、そのスイッチをそれぞれが発見することも重要と考えられること等が挙げられた。

[佐藤泰/早稲田大学、櫻井雄大/東京理科大学]

## 建築文化週間2018開催報告(本部企画)

日本建築学会

### 建築夜楽校2018

#### シンポジウム「建築のインターフェイス」

建築とインターフェイスをテーマにした建築夜楽校が、10月2日(火)に建築会館ホールにて開催され、建築におけるインターフェイスのあり方を議論した。講演者には、青木淳氏(建築家、青木淳建築計画事務所)、谷口暁彦氏(美術家、多摩美術大学講師)、水野勝仁氏(インターフェイス研究者、甲南女子大学准教授)をお招きし、シンポジウムには84名の参加があった。

インターフェイスとは、一般的にはコンピュータのディスプレイなどを指す語であるが、より広い定義としては「異なる概念的領域がつながる接点部分を指す語」(実用日本語表現辞典)である。つまり、インターフェイスの問題を考えることは、これまで2回の建築夜楽校で議論してきた「連続(接続)と切断」の問題を発展させることに繋がる。

「インターフェイス」という語自体は、建築言説ではあまり馴染みのないものであるが、両者は密接な関係を持っているといえるだろう。たとえば、設計プロセスにおいて必要不可欠な存在である図面やドローイングは実現されようとしているが、まだ現れていない建築物の存在を我々が透視することを可能にするインターフェイスと考えることができる。また、建築におけるインターフェイスの問題は、建築の歴史上でさまざまな形として顕れてきている。1990年代のデジタル・ターンに着目すると、ウィリアム・ミッチェルの「シティ・オブ・ビット」が提示したサイバースペースに影響を受けた諸プロジェクト(建築家のアシムトートがニューヨーク証券取引所のために設計した、株の取引の状況がさまざまな形態の動きや色の変化として可視化されたサイバースペース)は、情報空間と物質空間におけるインターフェイスとしての建築のあり方を追求したものであった。青木氏の〈ルイ・ヴィトン名古屋〉は内部のプログラム(ルイ・ヴィトンの店舗)と外部都市空間の境界面としてのインターフェイスである。さらに現代に目を向けると、スマートフォンの普及により、「インターフェイス-大衆」という構図から「インターフェイス-個人」という構図に遷移してきている。マスを対象にした全体性をもったインターフェイスから、個人を対象にした断片化するインターフェイスへの移行である。つまり、個人それぞれが、個別のインターフェイスを通して透視される現実を持っている状況である。そのような状況をもとに、どのように建築はインターフェイスを思考することができるかを議論することが、今回の建築夜楽校の目論見であった。

水野氏は、情報技術におけるインターフェイスの流れを概観し、現

在のインターフェイスデザインの潮流から読み取ることができるさまざまな示唆を提示した(当日の発表を自身のブログにアップロードしている。http://touch-touch-touch.blogspot.com 2018年10月4日投稿「建築夜楽校2018 シンポジウム「建築のインターフェイス」で使った資料と簡単な振り返り」参照)。谷口氏はインターフェイスを「異なるもの同士を繋げる・通訳する」ものと「単一なものを分離する・切断する」ものの2つに分類し、それをもとにアート・ゲームにおけるインターフェイスを考察した。青木氏はコーリン・ロウによる透明性の議論を引用しながら、「リテラル」なインターフェイスと「フェノメナル」なインターフェイスという2つを提示し、それをもとに建築におけるインターフェイスの現れ方を考察した。



会場風景

〔平野利樹/東京大学助教〕

## パラレル・セッションズ2018

### 「プロジェクト・リノベーション」

去る10月21日(日)、2016年から継続しているパラレル・セッションズが今年も建築会館ホールにて開催された。エントリーを受け付けると、20代から60代による35組の申込みがあり、5つのセッション(非公開の前半と公開の後半)に分かれて、5名のゲストメンターと議論を繰り広げた。一昨年からの通算して23回目から27回目のセッションとなった。

「プロジェクト・リノベーション」というテーマを掲げた今回は、議論の対象となる実際のプロジェクトをエントリー時の応募要項に加えることで、これまで以上に実践的な枠組を設け、協働の可能性を前提としたより本格的な議論が展開される仕掛けを用意した。

ゲストは、公共R不動産のコーディネーターでもあり、主に行政案件の公有地の利活用を担当する菊地マリエ氏。昨年に引き続きの参加で、クリエイティブな事業活動の財産法務や企業法務、資金調達のアドバイスを提供する法律の専門家の馬場貞幸氏。建築家で東京大学准教授であり、土木や都市計画といった隣接領域を軽やかに飛び越える川添善行氏。建築と不動産の間をつなぐ活動を広く展開する創造系不動産の高橋寿太郎氏。建築から都市まで、現代における発明的な作品を発表し続ける西沢大良氏の5名で構成され、それぞれ5つのセッションのうち3チームを巡回するかたちでご担当いただいた。セッションの構成は下記の通りである。

#### <セッション構成>

##### Session23——都市の余白をランドスケープとして扱う方法とは?

ファシリテーター:

井上宗則(建築文化事業委員会)

ゲストメンター:

馬場貞幸氏→高橋寿太郎氏→菊地マリエ氏

登壇者: 大野暁彦(SfG landscape architects,名古屋市立大学)/  
鈴木克哉(szki architects 一級建築士事務所)/堀裕貴

(関西大学大学院 住環境デザイン研究室)/黒澤健一  
(kurosawa kawataten)/屋台学会/吉永規夫(Office for  
Environment Architecture)/佐藤直樹(如是アトリエ)

##### Session24——コミュニティとテクニクスの有効な関係とは?

ファシリテーター:

辻琢磨(建築文化事業委員会)

ゲストメンター:

川添善行氏→西沢大良氏→馬場貞幸氏

登壇者: 谷繁玲央(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻)/  
横井創馬、北川健太、小野志門(セカイ)/板坂留五/  
岡山俊介(金箱構造設計事務所)/水野茂朋(mizuno.  
design)/山田織部/森元気(森元気建築設計事務所)

##### Session25——ローカル・プロジェクト・メディアの相互作用とは?

ファシリテーター:

川勝真一(建築文化事業委員会)

ゲストメンター:

菊地マリエ氏→川添善行氏→高橋寿太郎氏

登壇者: 吉川晃一、濱本真之(オンデザインパートナーズ)/王聖  
美(建築倉庫)/藤谷幹(創造系不動産)/伊藤孝仁  
(tomito architecture)/重松克弥(五十嵐千寛・鈴木啓生)  
(街角再生プロジェクト)/森藤文華+葛沁芸(2.5 architects)

##### Session26——産業を埋め込むことで見出される生活のかたちとは?

ファシリテーター:

川井操(滋賀県立大学)

ゲストメンター:

西沢大良氏→菊地マリエ氏→川添善行氏

登壇者: 川井操(滋賀県立大学)/多田正治(多田正治アトリエ)/  
岡田翔太郎(岡田翔太郎建築デザイン事務所商事合同会  
社)/水野太史(水野太史建築設計事務所、水野製陶園ラ  
ボ)/中島亮二/橋本芙美/町秋人(町秋人建築設計事  
務所)

##### Session27——地域を包摂する新しい空間の大きさとは?

ファシリテーター:

小泉瑛一(オンデザインパートナーズ)

ゲストメンター:

高橋寿太郎氏→馬場貞幸氏→西沢大良氏

登壇者: 小室匡示、下司歩(小室下司建築設計事務所)/堀田浩  
平(ハル建築研究所)/福井啓介(かまくらスタジオ)/山口  
陽登(シイナリ建築設計事務所)/森田元志/勝亦優佑  
(勝亦・丸山建築計画事務所)/小泉瑛一(オンデザインパ  
ートナーズ)

セッションではそれぞれ、土地の空き空間を積極的に活用するプロ  
ジェクト(23 ※ Session 番号、以下同様)や、竣工した曳家の計画の社会  
的意義の再検討(24)、建築家主体で実施する空き家となった民家の  
再生(25)、地方都市でのキャンプ場の計画のブラッシュアップ(26)、  
郊外におけるカフェと設計事務所を地域に開くプロジェクト(27)、とい  
ったプロジェクトが検討され、ゲストメンターとのエスキスの中でさらに醸

成されていった。異なる専門性、さまざまな地域で活動する参加者の経験と知識が重なることで、目の前のプロジェクトの課題がクリアに解きほぐされ、なおかつそれぞれのゲストメンターによって複数の解決の糸口が示された。時には異なる価値観、尺度からプロジェクトが検証され、当初の想定から大きく前提が変化するような事例も見られた。プロジェクトによっては、今回の議論の成果が社会に繋がっていくことになるだろう。

セッション間では、ゲスト同士が集合して各チームの提案を持ち寄り、情報を次のメンターにリレーするクロストークが開催され、パラレルに展開するディスカッションを全体に共有する時間として機能した。

エントリー制による主体的なモチベーションを持った参加者はこの3年間で200組を超え、ウェブサイト上のプラットフォーム上には、200組以上の参加者と27回のセッション情報がアーカイブされている。今後事業を継続的に展開し、分野を跨いだ新たな人材のプラットフォームとなることを目指したい。



会場風景

—  
 [辻琢磨/403architecture[dajiba]共同主宰  
 川勝真一/RAD共同主宰]

## カルチベートーク2018

### 「建築—広告からメディアアートへ」

今年度1回目のカルチベートークは、10月11日(木)に建築博物館ギャラリーにて開催された。登壇者には、建築出身ながら世界で活躍するデジタルデザインの旗手、齋藤精一氏(ライゾマティクス代表取締役社長)を招き、現代社会におけるメディアアート界の潮流「建築～広告～メディアアート」のシームレスな繋がりについて、その歴史や自身との関わり、今後の発展とその可能性について語っていただいた。

第一幕は、モデレーターの濱野(竹中工務店東京本店設計部長)より、齋藤氏のこれまでの略歴を紹介し、東京理科大学の建築学科を経て、アメリカのコロンビア大学大学院に行った経緯から、そこで学んだ内容と思想、実施プロジェクトの話を経て、クリエイターとして活動した後に、ライゾマティクスを創るまでの経緯やそのコンセプトについて伺った。

第二幕は、手掛けた具体的な内容を中心に、ライゾマティクスの仕事について初期から最新の作品までをご紹介いただき、デジタルデザインによる広告や歌手Perfumeの映像制作プロデュースと照明デザイン、そして都市計画のコンサルから建築BIMの活用までを手掛けた内容について、デザイナーとして楽しかった部分や苦労した部分を披露していただいた。

今までの著名なプロジェクトを含め、表現したかったイメージとその手法、街とITの関係性、BIMの未来や渋谷PJなど、それぞれのプロジェクトを依頼された経緯はとても興味深く、参加者27名との懇親も含め、非常に楽しいカルチベートークとなった。



会場風景

—  
 [濱野裕司/竹中工務店]

### 「住宅メーカーのデザイン」

今年度2回目のカルチベートークは、10月31日(水)に建築博物館ギャラリーにて開催され、日本を代表する大手住宅メーカーの設計デザイナーより、住宅デザインにける想いを伺った。

第一幕では、設計デザイナーの加藤常孝氏(住友林業 理事 住宅・建築事業本部建築デザイン室室長)、笹栗和幸氏(積水ハウス 徳山支店設計課長・チーフアーキテクト)、手島秀典氏(大和ハウス 周南支店 主任・ハウジングマイスター)、白浜一志氏(ミサワホーム 執行役員 商品開発担当)よりプレゼンテーションを行った。メンバーは奇しくも現役最前列の2名と、組織トップの2名となったため、それぞれの立場の違いに沿った話を伺うことができ、各登壇者の個性が光るトークイベントとなった。

住友林業の加藤氏からは、住宅展示場での新しい取り組みにおける事例等について伺い、ハウスメーカーの設計者といわゆる建築家とは違いがあるのかという問いに対し、立場に多少の違いがあっても想いは一緒であるとの話を分かりやすく説明していただいた。積水ハウスの笹栗氏からは、自らがデザインしたプロジェクト等いくつかの実例をもとに、会社組織の縛りのなかで、いかに自由で素晴らしい住宅作品を生み出すかについて具体的な説明がなされ、デザイナーとしての個性が光るプレゼンテーションとなった。大和ハウスの手島氏からは、プレハブを世に生み出した会社として、ハウスメーカー誕生の歴史からその進歩と現在多方面に成長を続ける会社の説明、そして自らが手掛けたデザイン性の高いプロジェクトにおいて、設計者としての熱い想いをユーモアも交えながら語っていただいた。ミサワホームの白浜氏からは、南極基地の話から、蔵シリーズなど、数多くのグッドデザイン賞を受賞したデザインシリーズを通して、ハウスメーカーならではの話を伺うとともに、デザイン性の高いプロジェクトから、建築主の要望によってさまざまな対応を可能とするハウスメーカーの特徴を明快に説明していただいた。

第二幕は、フリートークと質問が中心であったが、全員が共通する内容として、大企業としての品質とその質感やコストについて、さらにインハウスデザイナーとしての設計者の在り方や社会的評価、そして社外アピールについて、さまざまな想いが熱く語られた。今回、4名の設計



会場風景

デザイナーから、各社の強みや魅力の一旦が分かりやすく語られたと同時に、建築家や組織設計事務所、ゼネコン設計部などと全く変わらない、設計者としての気持ちを伺うことができ、それを日本建築学会の事業にて発信できたことは大変興味深く良い機会であったと感じた。懇親会も含め43名の参加者と一体となり、今回も非常に盛り上がったカルチャートークとなった。

〔濱野裕司/竹中工務店〕

## 学生ワークショップ2018

### 「建築学生サミット2018秋—平成の建築を考える」

10月27日(土)、28日(日)の2日間に渡り、建築会館ホールにて「学生ワークショップ2018—平成の建築を考える」が開催された。本年のワークショップは、全国の建築学生の有志が集まり、「平成の建築」を読み解いていくことで、これからの建築を考えるという趣旨のものであった。2日間に渡るワークショップは、1日目(以下、Day1)は学生のみ、2日目(以下、Day2)は八東はじめ氏(建築家・批評家、芝浦工業大学名誉教授)、豊田啓介氏(noiz architects共同主宰)、市川紘司氏(明治大学助教)の三方をゲスト講師として招いての議論となり、計61名の参加があった。以下に、両日の様子をレポートする。

#### ・Day1(10月27日)

Day1では、最初に学生ワークショップ実行委員の代表である加川より問題提起となるよう、平成におけるSNSと建築との関係についてプレゼンを行った。次に、以下の3つのテーマについて、段階的に議論を行った。

- 1: 平成の出来事は日本の現代建築にどう影響したか?
- 2: 平成の建築をどう読み解いていくべきか?
- 3: 平成と一緒に何が終わるのか?

議論のしやすい人数となるよう、それぞれのテーマについて、学生を3つのグループに分けて議論を行った。どのグループからも共通して、情報技術をはじめとしたテクノロジーの進歩およびコミュニティやサービスといったソフト面の話題があがった。一方、各グループでの議論は、技術の進歩から効率化への流れ、空き家や少子高齢化といった社会問題、建築と建築を超えた問題を結びつけること自体への疑問など、別々の方向に展開していった。全体として、平成において建築の領域がより拡張していることが確認できたと思われる。

#### ・Day2(10月28日)

Day2では、まず学生からゲスト講師に向けて、Day1での議論がプレゼンテーションされた。それに対し、八東氏、市川氏より、まだメディアによく現れてくるような枠組みだけで話していないか、話が国内に留まっているのではないかという指摘があった。

昼食をはさみ、豊田氏も加わり、ゲスト講師3名による「平成の建築」をめぐるプレゼンテーションおよび鼎談が行われた。八東氏からは「歴史は回帰するか?」というタイトルで、1945年の広島における原爆投下と、2011年の東日本大震災における福島原発事故を対比しつつ、災害からの復興という視点で平成を読み解いていただいた。市川氏からは、平成において「自然のような建築」「みんな」「反ステートメント、反ヴィジョン」という3つの兆候が漸進的に進んできたのではないかという仮説が語られた。豊田氏からは、平成ではテクノロジーによりこれまでの常識が拡張され、個別の系ではなく大きな系の制御が必要となっ

てきており、そのような領域横断的かつ高次元の出来事こそ建築家が先陣を切って扱うべきだという主張がなされた。

これらの議論をもとに、ゲスト講師からは「自然」「情報」「職能」という3つのキーワードが挙げられ、それぞれを市川氏、豊田氏、八東氏が担当し、学生も同じく3つのチームに分かれてゲスト講師+学生チームのかたちで議論が継続された。

「自然」をテーマとする市川チームでは、「自然」と「技術」の境界線を探りながら、「自然な建築」、「自然な都市」についての議論がなされた。「情報」をテーマとする豊田チームでは、「平成」をより細かい年代の単位に分解しつつ、「平成」がどのような「情報」の集まりとしてできあがっているのかについて議論を展開した。「職能」をテーマとする八東チームでは、建築家の領域の拡張とともに作家性が薄まってくること、それによって変化するであろう「職能」の未来について議論がなされた。それぞれの議論の結果が各チームからプレゼンされ、質疑応答などを経て議論が共有された。

これらを踏まえたうえで、今回の学生ワークショップのアドバイザーであった松田達氏(武蔵野大学専任講師)にも加わっていただき、参加者全員での最終ディスカッションが行われた。松田氏からは、議論の内容よりも、主張が少なく受動的な学生の議論の方法そのものに、良くも悪くも「平成らしさ」を感じたこと、また学生の自由な主張が少ないことの根源には、千葉雅也氏(哲学者)のいう「エビデンスシャリズム」(強迫的にエビデンス=証拠を求められること)が平成において蔓延し、学生が「説明責任」を強く感じすぎていることがあるのではないかというコメントがなされた。続けて八東氏からも、学生が見聞きしたことをそのまま発信して自分の意見が少ないこと、また豊田氏からも、議論の軸が見えず体系立てた議論を学生が苦手としていることが指摘された。

こうした大人からの指摘に対し、会場からは誰もが反論できず、学生が示した苦い表情が印象に残った。では、今回なぜ学生が自分の意見を述べられなかったと評されたのか。平成という時代には、情報化が進むと同時に多種多様な価値観が生まれてきた。情報や価値観が増えた一方、それらをしっかり理解しないと意見が述べられないと学生が思い込んでしまったのではないか。そして、それを無言の圧力に感じてしまっていたのではないだろうか。今回のワークショップを通して、図らずも議論の内容よりも方法によって、「平成らしさ」の一端を示してしまうこととなった。また、本来それぞれを肯定すべき「多様性」に対して、結局すべてに「曖昧」な対応をしてしまっていたことが浮き彫りとなった。今後、さらなる情報化の流れに対して、その荒波に飲まれることなく自らの価値観を明確にすること、大局を見据えた「軸」や「枠組み」をもって物事を考えることが、我々の課題となるのではないだろうかと感じた。

最後に、このような機会をつくっていただいた日本建築学会、依頼を受けてくださったゲスト講師の皆様、ご支援くださった協賛企業の皆様、そして運営の学生スタッフのメンバー一同に、この場を借りて御礼申し上げたい。



会場風景

【学生ワークショップ2018実行委員】

池本祥子(副代表、名古屋市立大学3年)、石津光(東北大学3年)、  
小笠原隆(名城大学3年)、木田大夢(新潟大学4年)、高木慎太郎(金  
沢工業大学2年)、利根川瞬(金沢工業大学2年)、中谷圭佑(東北大学4  
年)、山口裕太(名古屋工業大学4年)、梁取高太(新潟大学4年)

(50音順、敬称略)

学生グランプリ2018「銀茶会の茶席」

今年度の応募数は37作品であり、8月9日(木)に建築博物館ギャ  
ラリーにて開催された第一次審査会にて、第二次審査に進む入選3  
作品ならびに各々審査員賞1作品を選考した。なお、審査は公開さ  
れ、応募作品の所属・応募者名はブラインドされて行われた。8月16  
日(木)には1/1模型制作説明会を行い、建築文化事業委員および銀  
茶会関係者によって構造エスキスチェック、茶席のレクチャーおよび  
審査員賞の表彰が行われた。

第一次審査結果

<入選>1/1模型制作

No.10 Pylon Temple

小川航輝ほか2名

芝浦工業大学大学院

No.17 PAPER DANCE -ロール紙の茶席

崎元誠ほか2名

九州大学大学院/九州大学

No.32 華美 -乾漆茶席

呂亜輝ほか2名

東京藝術大学大学院

<審査員賞>

山本豊津賞

No.7 以茶會友

リンスンジェほか2名

中央工学校 OSAKA

辻琢磨賞

No.9 つぼみ -「華動」する坪み茶室

古賀桃子ほか2名

九州産業大学

山本至賞

No.10 Pylon Temple

小川航輝ほか2名

芝浦工業大学大学院

川勝真一賞

No.13 聚合庵 -銀座の要素を集約した茶室の提案

西沢大輝ほか2名

豊橋技術科学大学大学院

坂口裕美賞

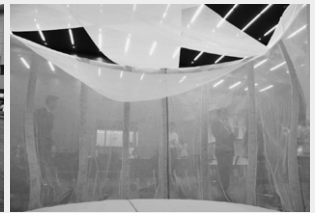
No.14 brilliance of wood

伊藤華恵ほか3名

鳥根職業能力開発短期大学校



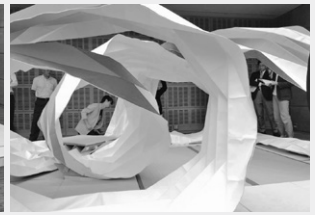
最優秀賞: 華美 - 乾漆茶席



優秀賞: Pylon Temple



優秀賞: PAPER DANCE - ロール紙の茶席



大森晃彦賞

No.15 二畳の洞窟

野田慎治ほか2名

滋賀県立大学

濱野裕司賞

No.16 花咲庵

奥村光城ほか2名

九州大学大学院

原田裕季子賞

No.19 羽化庵

瀨瀬麻人ほか2名

文化学園大学

佐藤淳、松田達賞

No.22 織 - セン

石黒隆芽ほか3名

中央工学校

斎藤公男賞

No.27 パオ - 包み込まれる空間

石河莉夏子ほか2名

東京都市大学大学院

鶴飼哲矢賞

No.28 蓄

阿部勇祐ほか6名

武蔵野大学

## 川合智明賞

No.32 華美 - 乾漆茶席

呂亜輝ほか2名

東京藝術大学大学院

## 井上宗則賞

No.33 パターンの優雅/A Patterned Elegance...

Bouayad Ghaliほか2名

東京藝術大学

## 加藤詞史、関野宏行賞

No.34 外纏庵 - 外界を纏う竹のカーテン

寶迫嘉乃ほか6名

日本大学大学院/日本大学

10月7日(日)に、建築会館ホールにて第二次審査会が開催され、第一次審査を通過した3作品は1/1模型を応募学生自らが制作し、公開審査によって最優秀賞、優秀賞を決定した。最優秀賞作品「華美 - 乾漆茶席」は実施施工され、10月25日(木)~29日(月)の間、銀座三越にて銀茶会の茶席として実際に使用された。銀茶会の茶席参加者は240名であった。

### <最優秀賞>

華美 - 乾漆茶席

呂亜輝ほか2名

東京藝術大学大学院

### <優秀賞>

Pylon Temple

小川航輝ほか2名

芝浦工業大学大学院

PAPER DANCE - ロール紙の茶席

崎元誠ほか2名

九州大学大学院/九州大学

[鶴飼哲矢/九州大学准教授]

## トウキョウ建築まち歩き

### 見学会「湯島・本郷」

トウキョウ建築まち歩きは、巡り歩く実体験を通してまちと建築の過去、現在、未来への知見を広げ、同時にその成り立ちに関わる人々の思いを知ることで、まちと建築への多角的な視点を獲得することを狙いとしている。今年度は参加者24名とともに「湯島・本郷」を歩いた。

10月16日(火)13時に不忍池からスタートして、まず本郷台地の東側にある「旧岩崎邸庭園」を訪れ、ジョサイア・コンドル(1852-1920)設計の「旧岩崎久弥茅町本邸」の洋館(1896)ほかを見学した。岩崎久弥は、三菱財閥三代目の当主である。「茅町本邸」というのは、この地がかつては下谷区茅町(かやちょう)という地名であり、他に「深川別邸」(現、清澄庭園)と「駒込別邸」(現、六義園)があったからだ。旧岩崎邸庭園の見学時間は35分。建物をじっくり見るにはあまりに時間が足りないが、「トウキョウ建築まち歩き」としては、不忍池から旧岩崎邸庭園へと坂を上ることがまず重要で、土地の来歴を知り、洋館の2階のテラスから今は見えなくなってしまった風景に思いを馳せることが必要だった。

コンドルの作品を訪れることにはもうひとつ意味があった。コンドル

に始まる東京大学の建築家の系譜は日本の近代建築の歴史に重なる。彼らの作品を辿ることも今回のまち歩きのひとつのテーマだったが、最も時間を掛けて歩く「まち」である東京大学本郷キャンパスには、コンドルの作品は残っていないからである(辰野金吾もだが)。

旧岩崎邸庭園を13時50分に出発し、北側の無縁坂(森鷗外の小説「雁」の舞台)を西に向かって上り、上り詰めたところの「鉄門」から東京大学本郷キャンパスに入った。ここからは鉄門で待っていただいた千葉学氏(東京大学大学院教授)の案内でキャンパス内を廻った。

東京大学は、1877年、洋学教育機関の「東京開成学校」と、医学教育機関の「東京医学校」が合併して創設。その前年末に東京医学校がこの地へ移転したのが本郷キャンパスの始まりで、鉄門の位置が当時の正門(1878、現存せず)だった。その正面に建っていた「東京医学校本館」(1876、設計:林忠恕)は、現在は「小石川植物園」の一面に移築されている。その後、東京開成学校を母体とする法科大学、文科大学、理科大学に加えて工科大学も次々と本郷に移転し、1888年には5つの分科大学の校舎が本郷に集結した。明治末に正門(1912、総長の濱尾新が構想、設計:伊東忠太、山口孝吉)ができたころには、街路やオープンスペースが整備された都市的なキャンパスが形成されつつあったが、1923年の関東大震災によってそのほとんどが失われてしまった。

現在の東京大学本郷キャンパスを特徴づけているのは、震災復興として建設されたネオゴシック様式の建物群だ。東京大学教授と営繕課長を兼任した内田祥三(よしかず、1885-1972)によるもので、その様式は「内田ゴシック」と呼ばれている。内田による復興計画で建築のデザイン以上に重要なのは、街路と広場によってキャンパスの骨格を構築したことだった。本郷キャンパスは時代の要請によりさまざまな増改築や新棟の建設が行われてきたが、香山壽夫氏(東京大学名誉教授)と、後を継いだ千葉氏らの取り組みにより、現在は内田の示した空間のルールを尊重したキャンパス整備が行われている。2017年には総合図書館の新館が総合

図書館前庭の地下に整備された。それによって、正門から安田講堂(1925)に向かう軸線に直行する総合図書館(1928)と工学部1号館(1935)のそれぞれの前庭を結ぶ軸線が甦った。

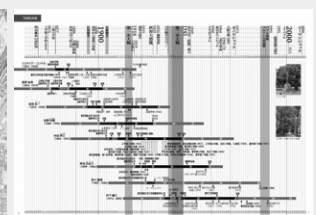
建物の内部は、千葉氏によって2014年に復元的に改修された安田講堂と芝生の前庭(かつては植え込みだった)、その地下の食堂、1996年に香山氏が中庭の室内化など



ハンドブック表紙



建築ガイドマップ



建築家タイムライン

の改修をした工学部1号館を見学した。

工学部1号館の前庭にあるコンドルの銅像に挨拶し、かつての工科大学本館(1888、設計:辰野金吾、現存せず)の中庭から移植されたというイチョウを見た後、千葉氏に御礼を申し上げ、15時45分に東大を後にし、武田五一(1872 - 1938、1897年東京帝国大学工科大学造家学科卒業)による「求道会館」(1915)と「求道学舎」(1926)に向かった。

「求道会館」は、真宗大谷派の僧、近角常観の信仰を伝える仏教の教会堂である。1953年以来長く閉鎖されていたが、2002年に修復された。煉瓦造、一部RC造で、木造の小屋組が美しくデザインされている。ほぼ毎月1回一般公開されており、イベント会場としても貸し出されている。

学生寮として建てられた「求道学舎」は、長崎・軍艦島の炭鉱住宅を除いては鉄筋コンクリート造の最古の集合住宅で、2006年にコーポラティブ方式の集合住宅にリノベーションされた。改修設計にあたった近角常観の孫の近角真一氏(集工舎建築都市デザイン研究所代表取締役)にご説明いただき、夕闇が迫る17時に解散となった。

なお開催にあたっては、参加者には無線ガイドシステムのインカムを用意し、周辺の建築を含むガイドマップと、関係する建築家の年表を掲載したハンドブックを配付した。

[大森晃彦 / 建築メディア研究所代表]

## 建築文化考2018

### シンポジウム「食空間のイノベーションと都市」

建築文化考2018「食空間のイノベーションと都市」が、建築会館ホールにて10月5日(金)に開催された。講師に、邑上守正氏(前武蔵野市市長、亜細亜大学客員教授)、仲俊治氏(仲建築設計スタジオ)、松下完次氏(竹中工務店)をむかえ、主題解説を関野宏行氏(佐藤総合計画取締役、建築文化事業委員会委員)、司会進行を加藤(加藤建築設計事務所主宰、建築文化事業委員会委員)が務めた。参加者は49名であった。

まず、関野氏から、現代都市が抱える制約、矛盾を読み解くキーワードとして「均質化」があげられ、人間の感情の入る余地を抑えることが現代的解決方法であったことが説明された。量から質への価値の転換、感覚や感性が入り込んだ価値が、現代では豊かさを実現する重要なポイントになっていることを共有し、日常の延長にある「食」も、均質化しながらボトムアップし、安価で良質な食があふれた反面、感動が薄くなっていることが述べられ、季節や地域などの価値について言及された。都市に期待される魅力の一つである食を日常的な豊かさとするために、都市や建築が深くかわる必要があることが示された。

第一部は、各講師より講演いただいた。松下氏は、表参道や銀座など都心の商業施設開発を中心に解説くださり、国内外多数の飲食企業との交渉や魅力的な飲食店の入居により人が集まることを目指してきたプロフィールを紹介され、「食が奏でるまちづくり」というテーマのもと6つのキーワードについて説明いただいた。

①商業エリアづくり:箱モノからテーマレストランを経て、食感など食そのものの魅力で集客する時代への遷移、食の種類による地域の棲み分け、エリアの集積が進んでいる現状の紹介。②トータルプロデュースの重要性:ハード先行の施設づくりではなく、ソフトとの連携が賑わいのある「生きた」施設となることを強調。③商業施設の抱える問題として、ネットリアルな店舗の現状、商業施設の均質化に対して地域性・施設固有・店舗のオリジナリティが課題解決につながると解説。

④皿から都市へ、都市から皿へ:皿に集まる人のつながりをキーワードに、食が都市の魅力を広げる例として、話題性のある飲食店の登場が出店の連鎖をよび、エリアの特徴が形作られていく姿を紹介。逆に、飲食店側を視点に、地元食材を活用したメニュー開発や既存の空間を生かした模索(倉庫のコーヒー店、古民家の海外ブランド)動向を紹介。⑤建築と食の視点:半戸外空間の活用による賑わいの染み出しや楽しさ、高い品質の食材を生かした空間・設備・環境から健康への視点、事例として食べたらずく、食べたあと歩く楽しい街づくりの取り組みを説明。⑥建築ウェルネス認証:「食」の評価項目を加え、サステイナブル建物のLEED認証とともに、Well認証を取得する世界的な流れを説明。従来のハード整備だけでは満たせない認証空間が、利用者の栄養、フィットネス、気分、睡眠、快適性、パフォーマンスを向上させる環境構築につながると解説。

物流、加工、保存の進化により世界に行きわたる幅広い食の可能性に触れながら、栽培の進化による自産自消の場づくりのもつ総合性を力説。「共有を東ね確かなものへ」を結びとした。

つづいて、邑上氏より、建築学科の出身ながら、生まれ育った武蔵野市の市長へ就任された経緯、市民主役の参加型まちづくりを推進するプロフィール、吉祥寺のグランドデザイン、武蔵野プレイスなどを紹介いただき、「食育から食文化まで…美しい街へのプロローグ」というテーマのもと、3つの観点から説明いただいた。①住みたい街として評価される吉祥寺を公園の緑とグルメタウンとしての評価軸から述べ、メディアによる紹介、こだわりある個人活動が吉祥寺らしさを創り出したことについて触れた。②子供たちの食の充実として、中学校給食の実施を学校教育の一環として行い、給食食育振興財団の設立、地産地消の取り組みについて説明。特に自校調理場方式の可能性を、食育と調理場の多機能化(給食・食育・災害時避難所支援)につなげ、学校建替え時に調理場とランチルームを設ける方向性を紹介した。③駅前を中心とした若者や賑わいの中心の商空間とは対比的な子供や高齢者、障がい者などへの視点が印象的な事例として、「まち」の食堂としてNPO法人による公的支援を受けない地域の力の活用により運営される「みかづき子ども食堂」、高齢者の居場所提供としてのミニデイサービス「テンミリオンハウス」、友好都市の食材を活用した市役所の食堂「さくらごはん」、社会福祉法人の経営で障がい者雇用のレストラン「七福」、公共複合施設のカフェであり独自展開をする「武蔵野プレイスフェルマータ」、空き店舗活用の創業支援施設コミュニティカフェ「みどりの」などを解説した。

食環境の充実が市民福祉を向上させて豊かな市民生活を支えること、公的支援の意義、食と建築(空間)によって食文化が創出されるなどを「住みたい街から住み続けたいまちへ」のキーワードに託し、結びの言葉とした。

仲氏が「食の社会性を建築化する」と題して山本理顕氏との共著「脱住宅」の背景から、建築家としての活動事例の紹介がなされ、地域の中での小商い、なりわいの変化などに着目している視点を解説した。「食堂付きアパート」では、小さな経済にまつわる用途複合として「住むと働くの融合」、「地域住民のコワーキングスペース」、「10坪の小さな食堂」の構成が説明された。食を媒介にして日常生活をつなげる具体例を食の社会性と呼び、生産者とシェフ(旬)、産地と居住者(マルシェ)、生産者と居住者(シェフの手仕事)、シェフと居住者(家守)、旧住民と新住民(味噌づくり教室)の5つの視点から、空間開発や企画開発ではなくライフスタイルを提案する姿勢を示した。

「公共的な空間への視点が醸成された経験」として、食堂の厨房

を営業終了後に村人が共同利用、楽しく料理するベトナムでの体験を説明、中間領域の発見が食堂のつくりかた(建築デザイン)につながることに触れた。「両義的な場のデザイン」であるつくとたべるは生産と消費の融合として、非血縁グループのソーシャルハウジングであり、シェアキッチン・ダイニングが地域に開かれたカフェとなるチュールビの集合住宅を紹介、小商いの実験室、設計中のシェアキッチンの取り組みについて触れた。

第二部は、議論のテーマを「場所性」「生産地」「食空間と食文化」の3つとして、司会進行を加藤が務めた。

まず、食と「場所性」については、Amazonなどの通販物販ではなく、その場所に行かないと得られない体験、飲食がより注目されている時代背景について、場所とより強く結びつく食の可能性(松下氏)から、行列が独特の体験を創出するとともに街に賑わいの景色を作っていること(邑上氏)、吉祥寺の路地性やスケール感を解像度が高い空間とした仲氏の言葉に可能性を感じた。表参道などの新しい取り組みは、郊外の都市などで移植され、同種でありながら別の体験として広がっていく、この両輪性が重要である。また、都心部の上層階に庭園やテラスなどのポテンシャルを持たせて、上がってみたいくなる演出とその高さならではの体験が場所に固有性を生む工夫につながり、新しい食空間と体験をつくりだしているようだ。

つづいて、「生産地」との関係性について邑上氏が述べ、近隣作物が人と人の距離感(子供と調理人、農家)を近づけることから理解が深まる点や作物にフィードバックされるなどの好循環を説明、遠隔地で分業化された経済循環が、一部であるが回帰する可能性が示されることとなった。松下氏はテクノロジーの視点から、人工照明などによる食物工場を上げ、収穫と食がダイレクトにつながる新しい体験の可能性を示した。仲氏は、近さの価値を循環とし、応答性とスパイ

フライヤー 作成:加藤詞史



東急プラザ 表参道原宿



武蔵野市給食・食育振興財団



食堂付アパート



松下完次氏によるプレゼンテーション

ラルアップとして価値を高める仕組みの重要性を説いた。また、邑上氏との議論から、都市内農地本来の価値、位置付けが明らかになっていない課題も見えてきた。

最後に、今後の「食空間と食文化」について、デザインされた心地良さとインフォーマルな心地良さ、余地の可能性を加藤が提示した。松下氏は米国の書店とコーヒョップの組み合わせの発端の解説、カフェ内で仕事をしている状況を働き方改革とし、人の振る舞いや関係性と空間の質について言及した。仲氏は、人が主役になるための方向性や姿勢を示すことが建築にできることではないかと述べ、関わる人の顔が見え、役割が固定化しない入れ替わるスイッチが面白く、これを受ける場として中間領域や循環の概念があるのではないかと結んだ。

松下氏の都心部をフィールドとした時代をこえる網羅的、俯瞰的な視点と実績、邑上氏の子供から高齢者、障害者までへの目配りと独自の行政手腕の一端、仲氏のさまざまなカテゴリーで、固定化したものをスイッチしていくための試み、その内容は食を軸にしながら、示唆にとんだものとなった。



シンポジウム 左から松下完次氏、邑上守正氏、仲俊治氏

[加藤詞史/加藤建築設計事務所]

## 建築文化週間2018開催報告(支部企画)

日本建築学会

### ●北海道支部

#### 見学会「建築散歩―帯広の名建築を巡る」

2017年、帯広市内に現存する旧双葉幼稚園園舎が十勝地方では初となる重要文化財(建造物)に指定された。本見学会では、この旧園舎を含めた帯広市中心部に現存する歴史的建造物の探訪を通して、まちの歴史を物語るうえで大切な財産=歴史的建造物が身近にあることを体感してもらえよう意図し、10月14日(日)10時より開催した。参加者数は子供から大人までの男女合わせて14名であった。

見学会はJR帯広駅北口に集合し、十勝の一大拠点として発展していった帯広と鉄道の歴史を振り返りながら北上、電信通りは東へ進み、時計回りにおよそ5kmの道のりを徒歩で移動した。主な見学先は見学順に、かじのビル(1958)、プリンス劇場(1953)、十勝信用組合(旧安田銀行帯広支店/1933)、野尻写真館(昭和初期)、宮本商産日本社ビル(登録有形文化財/1919)、六花亭サロン(旧三井金物店/1912)、旧岩野商店(1913)、Salon 齋藤亭(旧齋藤長明邸/1934)、成田山松光寺本堂(1935頃)および不動堂(1902)、大然寺聖徳太子堂(1927)、久呂無木(旧横瀬農夫邸/1932)、旧双葉幼稚園園舎(1922)である。基本的に外観のみの見学であったが、Salon 齋藤亭と双葉幼稚園は建物内部に入り、旧双葉幼稚園園舎の維持管理を担っている建築家の川村善規氏(梅檀の会/オフィスK&K)からそれぞれ解説を受けた。



Salon 齋藤亭は、8年程空き家となっていたものを創建者の孫にあたる富山弘美氏が2016年に改修し、地域のさまざまな活動の場に提供しているもので、参加者らは細かな組子や書院造りの設えを鑑賞し、落ち着いた雰囲気や敷に佇みながら和やかな時を過ごした。一方、双葉幼稚園は帯広で初めて開設された幼稚園で、帯広各界著名人との縁もある長い歴史を持つ。日本聖公会が創始のこの園舎中央には特徴あるドーム屋根を戴き、あたかも大聖堂を思わせる。計画と設計に携わった人物は、当時保母であった臼井梅氏(後に二代目園長)。見学会では、園舎がこのような形になった背景や歴史、見所について資料などを交えながら分かりやすく解説が行われ、参加者らは子供たちで賑わう在り日の園舎の姿に思いを馳せた。

参加者の中には家族連れも多く、天候にも恵まれた建築探訪は、秋の散策を楽しみながらの有意義な見学会となった。最後に、講師を快諾いただいた川村氏、参加者を暖かく迎えてくださったSalon 齋藤亭の皆様、見学会開催にあたってご協力いただいた全ての関係者の方々に記して感謝申し上げる。



Salon 齋藤亭での自由見学風景

梅檀の会、川村善規氏からの解説

[西澤岳夫 / 釧路工業高等専門学校准教授]

### 第43回「北海道建築賞(2018年度)」表彰式・記念講演会

第43回北海道建築賞の表彰式・記念講演会が、10月26日(金)夕刻より北海道大学遠友学舎において開催された。会場には、一般市民も含め、学生、大学関係者、建築業界関係者などが約70名集まり、葉の落ちたキャンパスの木々を背景として、親密な雰囲気の中で行われた。

表彰式は、千歩修北海道支部長の挨拶に続き、北海道建築賞として「東川小学校・地域交流センター」の設計(小篠隆生君)、北海道建築奨励賞として「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」の設計(松谷悟詞君)が発表され、千歩修支部長より各受賞者に表彰状と副賞のブロンズ彫刻が手渡された。その後、北海道建築賞委員会主査の山田から審査経緯・結果および審査講評についての報告がなされた。

今年度の応募は8作品であり、近年ではとりわけ少ない応募数であったが、「先進性」「規範性」「洗練度」を基本的な評価軸としつつ、書類審査と現地審査および最終審査会を通して、長い時間をかけた活発な議論の末に得た結果であることが報告された。北海道建築賞を受賞した「東川小学校・地域交流センター」は、都市計画をダイレクトに建築化するようなある種のスケールの大きさや論理の明快とともに、北海道における地方都市ならではの贅沢さに満ちた学校建築のあり方を示している点が特に評価された。また、北海道建築奨励賞を受賞した「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」は、構造・機能・ディテール・設備などがある水準を超えて全体が成立しており、

設計者の熱意とともに完成度の高さが評価された。

以上の表彰式に続いて受賞者による記念講演会が行われ、小篠隆生君から「東川小学校・地域交流センター」の設計について、また松谷悟詞君から「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」の設計についてのプレゼンテーションがあった。ここでは、各設計者の基本的な考えから、設計プロセスや具体的詳細に至るまでの解説によって、各作品についての理解を深めることができた。

続いて行われた記念パネルディスカッションでは、プレゼンテーションでの内容をベースとした議論が展開され、公共建築に対する建築家の新たな関わり方など、より詳細に各氏の考え方を把握することができた。二氏の発言は、一般的な設計監理業務を超えたところで設計者の工夫された関わり方が、建築のある枠組みを超えて行くことにつながっていることを示唆するようにも思われた。

第43回を迎えた北海道建築賞は、日本建築学会各支部の建築賞の中で最も早くに創設されたものであり、地域性を強く意識した北海道ならではのものである。長い年月に渡って、「北海道の現代建築」を位置付ける基軸を担ってきたことは確かであろう。北海道建築賞授賞式・記念講演会を今後も建築文化週間の行事として継続して行くことが、この場の発展のためにも望ましいと考えている。



パネルディスカッション風景

写真撮影:海藤裕司

[山田深 / 北海道建築賞委員会主査]

### ワークショップ「くしろ防災屋台村」

日本建築学会北海道支部では建築文化週間事業にて、主に親子を対象とした地域で防災を学ぶイベントを開催している。「くしろ防災屋台村」は、北海道釧路総合振興局との共催にて、昨年に続く釧路市子ども遊学館を会場に、第9回くしろ安心住まいフェアにて10月27(土)10時~16時に開催された。

この事業の特筆すべき点は、住まいに関する防災知識および住まいの知識向上を図ることにより災害に強く、安心で、質の高い住まいづくりの推進に寄与することを目的とし、釧路管内の建築関係団体と協働して開催しているところにある。当日は前夜からのひどい悪天候にもかかわらず、計411名の参加があり、未就学児から大人まで幅広い年齢層に参加していただいた。年々参加者数が増え、今年も昨年を越える参加者数となり、開催時間中来場者が途切れることがなかった。

くしろ防災屋台村のコーナーでは、「地震時の我が家のバーチャ

ル体験」「つくて、ゆらしてみよう」の2つのイベントを体験できる内容とした。

「地震時の我が家のバーチャル体験」では、参加者1名もしくは2名ずつとし、6畳のスペース内において自由に行動してもらい、地震時の室内音により地震を感知したら家具の倒れてこない室内空間へ移動することとした。この移動中の負傷部位・負傷程度を避難誘導システムで評価し、人工音声で伝えられる情報をもとに、家具が倒れてこない安全な室内空間への移動が成功するまで体験した。

「つくて、ゆらしてみよう」では、さまざまな長さの竹ひごとスーパーボールを使って建物模型を作ってもらい、それをポータブル振動台に載せて、揺れ方や壊れ方を観察した。さらに、竹ひごを斜めにブレースとして入れたり、厚紙を壁として入れたりするなど補強を試し、どのような建物が地震に強いかを遊びを通して体験した。

なお、他の団体も工夫を凝らした出展内容となっており、参加者の評価も高いものであった。



地震時の我が家のバーチャル体験 つくて、ゆらしてみよう

【麻里哲広/北海道大学助教】

## ●東北支部

### 第29回「東北建築作品発表会」

第29回東北建築作品発表会が10月6日(土)にせんだいメディアテーク7F スタジオシアターにて開催された。本発表会は、東北建築賞作品賞応募者より作品についてプレゼンテーションをしていただくものであり、作品賞の1次審査を兼ねるとともに、日本建築学会と地域社会との交流の推進、建築関係者の研鑽、ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築作品の探求を目的としている。本年度は小規模建築物部門7作品、一般建築部門16作品、その他の建築物部門2作品の計25作品と、震災前の水準に戻った。また、震災復興に関連する建築作品の応募が増えた点も特徴的であった。発表会においては、まず石川善美支部長より挨拶があり、その後、大沼正寛選考委員長により発表にあたっての注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき8分の短い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポイントについて充実したプレゼンテーション



石川善美支部長の挨拶

プレゼンテーションの様子

が行われた。質疑応答も2分という短い時間ではあったものの、活発な議論がなされ、活気のある発表会となった。比較的参加者も多かったが、来年度においては、さらに関係団体、大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のある発表の場にするよう努めていきたい。

【飛ヶ谷潤一郎/東北大学准教授、日本建築学会東北支部常議員】

## ●関東支部

### 見学会「シリーズ名作をみる—東京文化会館」

東京文化会館建築ツアーが、定員に達した50名の参加のもと、10月24日(水)9時30分～12時に開催された。天候も心配されたが、見計らったように小雨も止み、さわやかな秋晴れとなった。

東京文化会館は、1961年に竣工した前川國男の代表作の一つであり、建築の魅力と合わせて、オペラ・バレエに対応した本格的ホールである。国内外に「音楽の殿堂」としてその名が知れ渡る。出演したアーティストたちのサインやパネルは圧巻であり、このホールに対する強い思い入れが感じられる。関東支部として是非この機会にとの声が上がり、関係各位の多大なご協力のもと、大小ホールを同時に見学できる貴重な機会をいただくことができた。週中、午前という難しい設定ではあったが、募集から間をおかず定員いっぱいとなり、関心の高さが窺えた。

講師に前川建築設計事務所所長の橋本功氏、江川徹氏、永田音響設計の石渡智秋氏をお招きし、建物の魅力を多様な角度からご紹介いただいた。他の傑作を交えた設計思想の系譜や特徴にも触れていただくことで、見学会での見どころが定まると同時に、前川建築への興味をさらに深めることができた。

大小ホールでは、意匠、音響的特性、建設時・改修時の裏話も含め包括的かつ丁寧にご案内いただき、改めて空間の迫力を知ることとなった。ホワイエでは、前川建築の作法といえる周囲との関係性、ディテールへのこだわりを堪能した。天井、床の計算された意匠、手すり一つ一つへの執着は、見事としか言いようが無い。国立西洋美術館との関係性をご説明いただきながら見る屋上からの景観は、非常に貴重な体験となった。

見学会終了後も、外周をご案内いただくことができた。自由参加ではあったが、ほとんどの方に参加いただいた。改修設計での工夫、継承することの大切さ、ご苦労を深く感じる事ができた。

「文化の杜」の象徴として人々から永く愛される理由を改めて実感



大ホール内観

小ホール内観



ホワイエ

する見学会となった。

[廣瀬浩二/日本建築学会関東支部事業企画運営委員長]

### 構造デザインフォーラム2018(第24回)「テンション構造の魅力を再考する」

日本建築学会関東支部構造専門研究委員会(設計WG)主催の構造デザインフォーラム「テンション構造の魅力を再考する」が11月10日(土)15時~17時30分に建築会館会議室にて行われた。1995年にスタートして今年で24回目を迎えた構造デザインフォーラムは、恒例の建築文化事業の一環に位置付けられており、昨年同様、建築博物館ギャラリーで開催(11月9日(金)~16日(金))された「アーキアリング・デザイン(AND)展2018 テンション構造はいまー」との連携を図っての開催となった。今年度の構造デザインフォーラムは、「テンション構造の魅力を再考する」と題し、山我(NTTファシリティーズ)と吉原正氏(三菱地所設計)、益子拡氏(ユニバァサル設計)、田中初太郎氏(清水建設)のエンジニア4名によって講演がなされ、全体の進行はモデレーターの斎藤公男氏(日本大学名誉教授)、司会を中村伸氏(日本設計)が行った。参加者数は、76名(社会人36名、学生40名)と多くの方々に参加いただき、テンション構造への関心の高さが感じられた。

#### ● 帝京大学八王子キャンパスSORATIO SQUARE

山我より、帝京大学八王子キャンパスSORATIO SQUAREの食堂に採用した張弦梁構造が紹介された。大空間ではなく、食堂という階高があまり高くない空間に張弦梁を採用しているため、張弦梁の存在感・圧迫感を感じさせないような工夫が行われていた。扁平な形状とすることやディテールをシンプルにすることが張弦梁の存在感を和らげている。また、テンションロッドの場合は東本数が増えることにより、テンション材の端部金物のコストが増加することやデプスがより大きくなるなどの問題があるため、ケーブル材を採用していた。意匠計画では、居住域空調方式の採用、天井面のシンプル化により張弦梁が際立つ空間を演出していた。施工時は、張力と変位の関係をあらかじめグラフ化することにより視覚的に把握できるようにし、張力導入管理を行っていた。

#### ● 石神井体育館

吉原氏より、企業の部活動等に利用する体育施設のアリーナを覆う屋根に採用された車輪型張弦梁屋根について紹介された。アリーナは、36m×36mの正方形であるが、そこに直径35mの円形状の屋根を架構し、四隅のハイサイドライトから採光を取り入れる計画となっていた。車輪型張弦梁は、中央リングと円周を20等分した位置に放射状に配置した上弦材および下弦材で構成していた。下弦材のケーブルは、上弦材の外端から中央リングを通り上弦材の外端に戻るよう配置され、ケーブル自体は1本のV字形状となっており、これまでにない車輪型張弦梁架構であった。ケーブル端部のディテールは、ケーブルを曲げた際に耐力低下が生じないようにケーブル径の8倍の半径を確保したR加工のケーブルガイドを設置していた。施工は、ケーブルをバランスよく緊張するために4回の緊張工程にて行っていた。ケーブル緊張力と支保工反力を測定することで、施工時解析通りに実施できていた。

#### ● 気仙沼市魚市場

益子氏より、気仙沼市魚市場について紹介された。この市場は、東

北地方太平洋沖地震で甚大な被害を受けた気仙沼市の復興のシンボルとして計画された建物で、卸売市場という用途から柱の少ない空間を構築するためにロングスパンが必要となったが、コンクリートの供給が安定しない恐れがあったためプレキャストプレストレストコンクリートを採用していた。既存の栈橋式岸壁が設けられているため、海側にはスパン17mの片持ち梁とする必要があり、梁先端をケーブルによって引っ張ることにより実現していた。この吊ケーブルを用いた構造システムは、気仙沼市の復興計画のキャッチフレーズである「海と生きる」を表現するため、船のマストをイメージしてデザインされたものであった。

#### ● 有明体操競技場

田中氏より、東京2020オリンピック・パラリンピックの主要施設の一つである有明体操競技場について紹介された。スパンが約90mの大空間を大断面集成材によって構築する計画であった。木は、鉄と比較し剛性が1/20、耐力が1/10の材料であるが、比強度が高く構造材として有効であること、異方性の材料でクリープ変形が大きいことなど木材を採用する際の注意すべき事項について説明があった。90mのスパンは、スパンの両端から約10mの木質キャンチ梁を設け、中央の約70mを木質張弦梁で架構する計画であった。梁断面はせい



模型を用い、活発な質疑応答が行われた



会場は学生も多数参加し、満員となった



斎藤公男氏(日本大学名誉教授)



中村伸氏(日本設計)



山我信秀氏(NTTファシリティーズ)



吉原正氏(三菱地所設計)



益子拡氏(ユニバァサル設計)



田中初太郎氏(清水建設)

1150mmの集成材を2〜3つ組み合わせていた。施工は地組をし、リフトアップする計画とすることで施工性、安全性に配慮した計画となっていた。木材の継手は、鉄筋挿入接着接合を採用し、キャンチ梁と張弦梁の接合は、ルーズホールが設けられた鉄骨部材による接合とすることにより、耐力と施工性に配慮した接合部となっていた。

● パネルディスカッション

講演者4名にモデレーターの斎藤氏を加え、質疑応答を中心としたパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、ケーブルをターンさせた張弦梁について、ディテールや利点などについての質問があった。吉原氏より今回の試みについて、構造技術の新たな発展を踏み出したに過ぎず、今後の設計にも応用できるアイデアであり、さらなる発展を目指したいと説明があった。パネルディスカッションの後に、建築博物館ギャラリーへ移動し、アーキアリング・デザイン展に展示している模型やパネルを用いて、講演者による説明や質疑応答を行った。会場では質問が少なかったが、講演者を囲み活発な意見交換が交わされていた。模型を用いての説明により、構造原理やイメージを理解しやすく、学生をはじめ若手の方々にも興味をもってもらい、さまざまなディスカッションをすることができた。

【山我信秀/日本建築学会関東支部構造専門研究委員会設計WG主査】

● 東海支部

見学会「建築ウォッチング—ミツカンミュージアム」

今年の建築ウォッチングは、2015年に開館し、2018年7月にリニューアルオープンしたミツカンミュージアムである。穏やかな秋晴れとなった10月13日(土)、31名の参加者とともに見学した。この地域は半田市都市景観地域にあり、黒塗り外壁の木造工場群やその施設の間を巡る運河など、半田市の中でも特別な地区となっている。

最初に、施設設計者の高橋勉氏(NITTFacilities)より、施設的设计意図やその実現に向けた取り組みについて伺った。

この施設は、①ミツカングループ発祥の歴史ある風景を継承しながら、次の時代に対応した新しい機能や環境対策を備えること、②地域に根差した企業文化を伝え、過去・現在から未来へとつなげていくこと、を目指し「伝統」「革新」「環境」の融合をテーマに掲げ、施設計画をおこなったという。

過去に何度かこの周辺を散策したことがあるが、この施設は、実に周囲の古い工場群の風景と一体化していると感じていた。それは色調、軒の高さ、道路からのセットバック、勾配屋根の採用、看板や軒先のディテールの配慮など、歩く人の目に入る部分のデザインを考慮したことにあつた。また周囲工場群の杉板下見張の黒外壁が醸し出す「不均質な柔らかさ」を現代の均質な材料で表現するため、3種類のリブ幅の金属板をランダムに配置し単調さを排除することで違和感なく周囲の風景になじませていることにあると感じた。

これらの細やかな配慮により、過去から現在に続く景観の継承は見事に行われているが、その一方で現在の建築技術を駆使して先進的な試みがなされている。構造計画では「コの字型」に配置された建物全体をひとつの大きな基礎でつなぎ、全体を免震装置で支え、地震対策を行っている。また、この運河沿いを北上する河川風を取り込む自然換気システムの採用や、当時あった煙突のモチーフを集熱装置として再構築し、自然換気を促進する仕掛けとして使用している。そして、酢の製造に利用していた地下水や太陽熱を空調システムとして

使用し、エネルギー利用量の低減を図っている。

施設は運河や通りに面して勾配屋根の黒壁デザインとなっているが、中庭空間はシルバー基調の外壁材やガラスを用いた開放的で現代的なデザインとなっている。中庭は一部が「水盤」となっており、空調で使用された井戸水を再利用している。この水盤と深く出された軒裏の仕掛けにより自然光が反射して内部空間に導かれ、トップライトと合わせて「光の庭」と名付けられた展示空間をやさしい光で満たす工夫がなされていた。これらさまざまな建築技術を駆使して、過去とも調和し、未来へつながる施設となっているのである。

設計者による説明後、ミュージアム展示の見学となり榎原健氏(ミツカンミュージアム館長)による施設展示の説明をいただいた。施設は、江戸時代から続く酢づくりの歴史、醸造技術の紹介や食文化の魅力など、単に「酢」の製造説明だけでなく「酢」を主軸として現在を生きる人に「食生活」の重要性、大切さを伝えている体験型ミュージアムとなっている。展示は「大地の蔵」「風の蔵」「時の蔵」「水のシアター」「光の庭」の各ゾーンに分かれている。その詳細については、是非見学によって体感してほしいと思い、ここでは割愛させていただくが、説明の中で館長が話されていた「企業が永遠に守るべき2つの原点」として「買う身になってまごころこめてよい品を」「脚下照顧に基づく現状否認の実行」を実行し続けること、そして「やがて、いのちが変わるもの」をお客様に提供していく価値の宣言とし、ひとの命の源である食品を提供するという責任と自覚を持って行動している、ということが強く印象に残った。

この宣言の中に込められている強く深い思いをCMからも感じ、ハードとソフト両方を体験できたこの見学会は大変有意義なものとなった。今回の見学会のために東京からお越しいただいた高橋氏、楽しくわかりやすい説明をしていただいた榎原氏に感謝の意を表したい。



ミツカンミュージアム外観



設計者による施設設計の主旨説明



ミツカンミュージアムエントランス



館長による展示空間「大地の蔵」の説明  
奥は当時酢の醸造に使われた大樽



「風の回廊」から見る、江戸時代から  
続く黒壁の工場群



現代的な素材で構成された中庭と水盤

【富田昌志/伊藤建築設計事務所、日本建築学会東海支部事業委員】

## ●北陸支部

### たてもの探偵団2018「高岡周辺の近代建築めぐり」

第二次世界大戦で空襲を受けた富山市に比べ、高岡市内には戦前の近代建築が数多く残っている。しかし、それらの建物の中には存続の危機に瀕しているものも少なくなく、保存・活用が大きな課題である。そこで、今年度のたてもの探偵団では、身のまわりにどのような近代建築があり、どのような状況にあるのか、歩きながら見てまわることになった。9月29日(土)、森本英裕氏(職藝学院専任講師)を講師に招き、高岡工芸高校の高校生、富山大学芸術文化学部の学生と教員、職藝学院の学生と職員、建築の設計や保存の仕事に関わっている方々、大工や左官職人、建築好きな一般の方々など、さまざまな世代やバックグラウンドの総勢34名が集まり、伏木地区および山町筋を探訪した。

午前中は、復元改修に関わられた森本氏や大工・左官職人の方による解説を聞きながら、伏木測候所(1907)を見学し、復元改修工事時のエピソードや資料なども見せていただき、復元改修工事の難しさや楽しさを肌で感じる事ができた。その後、レトロ感漂う伏木のまちを歩き、旧伏木銀行(現・高岡商工会議所伏木支所、1910)を見学した。

その後、高岡の近代水道の発祥といわれる清水町配水塔資料館(1931)を見学し、重要伝統的建造物群保存地区・山町筋へ移動後、土蔵造りの町家や近代建築をリノベーションしたレストランの数軒に分かれて昼食をとり、森本氏が保存再生に関わった高岡市御車山会館の旧佐渡家土蔵(大の蔵1825、中の蔵1695)を見学した際に、土蔵の曳家や左官工事について詳しい話を伺った。引き続き、佐藤桂氏(文化財保存計画協会)の御実家の土蔵造りの町家を、ご本人の思い出話を伺いながら見学し、富山銀行本店(旧高岡共立銀行本店)、井波屋仏壇店はじめ、山町筋の近代建築や土蔵造りの町家群を散策した。最後は、文具商の建物と土蔵群をリノベーションした山町ヴァレーを、改修に関わられた大菅洋介氏(建築家・町衆高岡)、漆工芸家・国本耕太郎氏の解説のもと見学した。

あいにくの秋雨模様だったが、高岡に残る多くの近代建築を満喫し、それらの保存再生に関わってきた方々の生の声を伺うとともに、高校生から60代までの参加者同士にも熱い交流が生まれた一日となった。



塔屋が復元改修された伏木測候所

[萩野紀一郎/富山大学准教授]

## 第8回「越前・若狭の建築文化探訪」

### 「戦後福井の近代建築・見学会(2)日本聖公会・福井聖三一教会」

日本建築学会福井支所主催の「第2回 戦後福井の近代建築見学会」が、10月14日(日)午後から福井市中心部に位置する福井聖三一教会にて行われた。今年5月より、この教会堂建築の学術調査研究を実施した建築土木工学科の市川秀和研究室が、昨年の第1回(別格官幣社・福井神社)に引き続いて当日の見学会進行を担当し、27名の参加があった。

福井聖三一教会は、プロテスタント系英国教会に属する日本聖公会の福井県拠点であり、このほか県内には敦賀基督教会と小浜聖ルカ教会が知られている。当教会は、アメリカ人建築家ガーディナーに学んだ専属建築家・上林敬吉の設計で1931年に竣工し、鉄筋コンクリート造と木造天井を複合した小さな美しい教会建築として有名であったが、1945年の福井空襲にて全焼し、1948年の福井震災直後に再建されたものの、詳しい経緯や建築的特色など関係者の中でも不明なことが多かった。

そこで福井市内の戦後建築調査を地道に続けている市川研究室が、この5月より本格的な現地調査に着手し、また8月から1年生の安田壮馬君と山口圭亮君が積極的に参加してくれたおかげで、いろいろな新しい事実が明らかになっていった。この見学会においても1年生の2名は大活躍し、30名程の参加者に向けて、これまでの調査結果に基づく説明役を担当した。安田君は、戦後の再建に際して変更された構造と意匠について解説し、さらに山口君は、祭壇内のギリシア語と十字架を組み合わせたプロテスタント独特の装飾文様について解説した。なお見学会の様子は、地元の福井新聞や建設工業新聞にも大きく報じられたことを付記しておきたい。



礼拝堂での見学会の様子



現状の福井聖三一教会 正面外観

[市川秀和/福井工業大学教授]

### 講演会「世界遺産 ル・コルビュジエ作品群—国立西洋美術館を含む17作品登録までの軌跡」

日本建築学会富山支所では、建築家・山名善之氏(東京理科大学教授)を招いた講演会を、10月19日(金)15時30分～17時30分に富山県民会館にて開催した。会場には、高校生から80代の方まで、総勢73名が集まり、山名氏による10年以上にわたるコルビュジエ作品群の世界遺産登録の苦労話や近代建築の保存にかける熱い思いに耳を傾けた。

古い伝統建築だけでなく近代建築をどのように保存していくべきか、また、その価値を地域としてどのように受け止めるべきか、大都市だけでなく地方においても重要な課題となっている昨今、山名氏の生の体験談や情熱を肌で感じる良い機会となった。また、山名氏が現在関わっている日本やアジア各地での活動を紹介いただき、今後のますますの

展開を確信した。これを機に、北陸地方においても近代建築の保存活動が浸透していくことを期待したい。



山名善之氏によるレクチャーの様子

〔荻野紀一郎/富山大学准教授〕

#### 見学会「金沢市の景観保全の取り組みをめぐるツアー」

金沢の中心部にはさまざまな時代の建築が混在しながら現存している。日本建築学会石川支所では、「こまちなみ保存区域」として指定されている里見町区域と水溜町区域を対象に、歴史と現代を重ね合わせながら景観保全の取り組みによる成果を巡るまちあるきツアーを10月20日(土)に開催した。「こまちなみ保存区域」とは、重要伝統的建造物群保存地区とは異なり、金沢市が独自に行っている景観保全の施策の一つで、歴史的まちなみから現代の建築までが入り交じりながら魅力的な都市空間を造り出している。このような建築やまちなみ景観をゆっくりと巡り歩くことにより、普段気がつかなかった新しい金沢の魅力に気がつくはずである。まちあるきのガイドは宮下(金沢工業大学准教授)が務め、金沢市役所よりスタートした。

まず、武士系の流れをくむ住宅が多く残る里見町区域を見学し、武士系の住宅の特徴やこまちなみ保存制度によって修景された土塀、改修された建物などについて解説した。その後、鞍月用水沿いの小さな橋が連続するまちなみなどを見ながら、旧川縁米穀店を改修した金澤町家情報館を見学した。金澤町家情報館では、町家の空間体験をするとともに、改修の様子、金沢市の町家の再生に対する助成制度などについても説明がなされた。最後に、もう一つのこまちなみ保存区域である水溜町区域を見学し、ツアーは終了した。

天候にも恵まれ、他県も含む14名の参加があったが、金沢市内に住む参加者からは、「こまちなみ保存制度自体を知らなかったので、景観保全の取り組みを知ることができてよかった。」などといった声も聞か



里見町区域を見学する参加者

金澤町家情報館で説明を聞く参加者

れ、他県からの参加者も「金沢が魅力的な町であるために工夫していることがよく分かった。」という感想もあり、とても有意義なまちあるきとなった。

〔宮下智裕/金沢工業大学准教授〕

#### 第6回「福井の地から建築史・建築論を考える」

#### 討論会「増田友也から玉腰芳夫への思索を超えて—建築論の京都学派の課題と展望」

この企画事業は、福井の地に深く関わる森田慶一の『西洋建築史概説』(1962)刊行50周年を記念した加藤邦男氏の講演会から始まり、第2回目以降は、森田慶一から増田友也、渡部貞清などへの建築論的思索を取り上げ、京都大学・福井大学を中心とした建築論の射程をめぐって議論を積み重ねてきた。それを踏まえて第6回目となる本年度からは、「学派 school」として再度捉え直した「建築論の京都学派の課題と展望」というテーマのもと、増田友也から玉腰芳夫への思索の歩みに注目し、日本住宅の空間現象や住まうこと、場所・風景なるものへと深められた独特な建築論の展開を掘り起こし、今なお生き続ける知の働きかけに呼応しながら、新たな可能性を模索したいと考え、10月28日(日)にJR福井駅前アオッサ6階研修室にて討論会を開催した。

まず、西村謙司氏(日本文理大学教授)は、増田友也の簡単な略歴と主要な著作について紹介したうえで、増田の『家と庭の風景』(1964)の全体構成、さらに目次内容に沿って実に詳細な解説を行った。この増田のテキストは、日本住宅の歴史を独自の視点で解き明かしたものであり、かつ増田の前期・空間論から中期・風景論への展開を考えるうえで極めて重要であることが指摘された。

続く玉腰芳夫の『日本古代のすまい』(1980)について川本豊氏(福井工業大学シニア院生)は、イへの語源から住まいの意味を考察し、さらに隔離の空間現象にみる場所の構造を精緻な文献学的手法から論及しつつ、増田友也と田中喬との比較にまで射程に入れた京都学派の核心を突く発表内容であった。

この西村氏と川本氏に対して、中村貴志氏(建築論研究所代表)と西垣安比古氏(京都大学名誉教授)からそれぞれコメントをいただき、増田から玉腰への問いの継承と差異などをめぐって活発な討論があり、



西村謙司氏



川本豊氏



討論会の風景

参加者18名の会場からも熱心な質疑が重ねられた。森田・増田以降の建築論にとって課題の共有性ととも、多様な異質性が浮き彫りになったと言える。

当日は、地元福井や北陸だけでなく、関西方面からもご参加をいただき、増田友也と玉腰芳夫を通じた建築論的思索をめぐる刺激的な討論となった。ご協力いただいた皆様には深く感謝申し上げますとともに、さらに引き続き、来年度の第7回においても新たな建築論的思索の進展を発信していきたいと考える。

[市川秀和/福井工業大学教授]

### ●近畿支部

#### 近代建築見学会および講演会

##### 「関西大学第一中学校・第一高等学校校舎ほか」

去る10月20日(土)、大阪府吹田市にて、日本建築学会近畿支部主催による関西大学第一中学校・第一高等学校校舎などの見学会と講演会を開催した。

関西大学千里山キャンパスは、戦後、村野藤吾がキャンパス計画に携わり、1950年頃から約30年にわたって約50棟の建築を設計し、村野によって現キャンパスの骨格がつけられたと言える。更新により失われたものも多いが、現在でも約半数が現存し、特色あるキャンパスが形成されている。

その千里山キャンパスに、併設校の関西大学第一中学校(以下、一中)、関西大学第一高等学校(以下、一高)が所在している。一中は1947年、一高は1948年に新制の学校として大阪市内の天六学舎に設置されたが、より良い教育環境を求め、千里山への移転が決まった。校舎群は村野藤吾の設計により、そのうち5棟が現存している。

見学会では、近代建築部会幹事である橋寺知子氏(関西大学准教授)が解説・案内を担当した。最初にグラウンドに面して建つ第一高等学校校舎(一高校舎2号館、1953)と隣接して建つ高中理科特別教室(一高校舎3号館、1966)を見学し、その後、扇型の特徴的な平面形をもつ第一中学校校舎(一中校舎1号館、1957)、変形の六角形平面を持ちペランダの深い軒を支える先細りの列柱やスパニッシュ風の赤い瓦屋根葺が特徴的な景風館(1955)、第一高等学校新校舎(一高校舎1号館、1980)の順に見学した。

見学会後は、関西大学会館(1965、小河建築設計事務所+村野・森建築事務所)に移動し、村野藤吾および関西大学千里山キャンパスの建築に関する講演会を開催した。講演会では、最初に橋寺氏が「関西大学千里山キャンパスと村野藤吾」と題して講演し、つづいて、笠原(京都工芸繊維大学助教)が「村野藤吾作品に見る地形の扱い」と題して講演した。その後、短時間ではあったが、参加者とともに、校舎群の保存活用の可能性や難しさについて議論した。

今回は定員を上回る応募があるなか、当日は39名が参加した。



第一中学校の校舎(見学会風景)

景風館

東京からも複数の参加があり、関心の高さを感じた。建築専門雑誌や作品集に掲載された関西大学の校舎群に比べ、一中・一高の校舎群は村野作品としてあまり知られておらず、これまで見学の機会が少なかったため、貴重な機会となった。

[笠原一人/日本建築学会近畿支部近代建築部会主査、  
京都工芸繊維大学助教]

### ●中国支部

#### シンポジウム「まちと公共空間のデザインマネジメント in Fukuyama」

シンポジウムは、10月20日(土)の10時~12時に広島県福山市のまなびの館ローズコム(4階 中会議室)にて、日本建築学会中国支部主催、福山商工会議所・福山駅前等歩道空間活用社会実験実行委員会・福山市役所の共催で行われ、55名の参加があった。10月19日~21日にかけて福山駅前にて開催された福山駅前等歩道空間活用社会実験:OPEN STREET FUKUYAMA(以下、OSF)Vol.3との共同開催である。OSFは、「ミチ」をキッカケとした楽しいまちづくりをテーマに、歩行の快適性、回遊性の向上を目的とし、公共空間活用によるまちなか再生の可能性を検証する社会実験で今回が3回目となる。本シンポジウムでは、これからのまちの公共空間の在り方について考えを深め、機能や形態のみならず、管理者と利用者を取り込むデザインプロセスの議論も展開された。

まず、三谷繭子氏(福山駅前等歩道空間活用社会実験実行委員会代表)より、「福山駅前の歩道空間活用社会実験の報告(OSF Vol.1、Vol.2の検証結果、課題と展望について)」等OSFの紹介があり、Vol.1、Vol.2で行ったアンケート調査やアクティビティ活動調査の結果から通行量の増加やアクティビティの種類と質の充実がみられ、今後の展望として、滞在空間の有用性、まちなか再生の可能性を感じたと話した。また、歩行者、滞在者の増加に伴う課題として自転車や徒歩などの交通の住み分けの必要性を指摘した。

続いて、野原卓氏(横浜国立大学大学院准教授)より、「パブリックスペースをキッカケに豊かなまちを創る」と題した基調講演を行った。「公共空間の在り方」について都市の成り立ちと重ねて説明された。加えて、減縮時代における日本の都市における公共空間と民間空間の役割分担、公共空間の在り方の変化について説明した。また、「くら×にわ(福島県喜多方市ふれあい通り)」「花園町通りの道路空間再分配(愛媛県松山市)」「アクアテラス(千葉県柏市:柏の葉スマートシティ2号調整池)」「都市デザインと横浜の公共空間(神奈川県横浜市)」の事例を挙げ、各事例の説明とともに、まちを育む公共空間形成についての説明を行った。

最後に、クロストークでは、これまでの話をもとに市の職員、商工会議所や市民が感想や意見を話し、非常に有意義な意見交流がみら



「福山駅前の歩道空間活用社会実験「パブリックスペースをキッカケに豊かなまちを創る」における三谷繭子氏

「パブリックスペースをキッカケに豊かなまちを創る」における野原卓氏

れた。そして最後には、松田智仁氏(広島市江波山気象館館長)がまちづくりを行っていくうえでの要点を指摘した。①地域地域の目標を定めること②地元の人々と行政が共同すること③ニーズとポテンシャルのギャップを埋めていくこと④どのような人々をターゲットにするのかを絞ってまちづくりを行うこと、である。

今回のシンポジウムでは、大学教員・学生をはじめ、市の職員や市民といった幅広い参加がみられた。福山駅前等歩道空間活用社会実験では市民の参加も一つのテーマであったため、このような機会は非常に有意義であった。

〔岡辺重雄/福山市立大学教授〕

#### ●四国支部

##### シンポジウム「これからの地方都市を考える—いろいろな視点でみた『まち』」

日本建築学会徳島支所の担当により、シンポジウム「これからの地方都市を考える—いろいろな視点でみた『まち』」をとくぎんトモニプラザ3階大会議室にて、10月13日(土)13時30分～17時に開催した。当日は、地元建築関係者や学生など30名の参加があった。

#### ・第一部:基調講演「地方都市をリノベーションできるか」

貞包英之氏(立教大学准教授)による講演の概要は、下記のとおりである。

消費という観点から歴史的に都市を捉えてきた。今回の講演タイトルであるが、変わらざるを得ない、と考えている。地方都市は、近代以降、行政、教育、軍隊の存在により一定の消費が保たれてきた。しかし、近年、消費自体が落ちている。

新陳代謝の不足が問題である。都市の楽しさ、すなわち、新しいものに出会い、知り、変わっていくことが、地方で起こっていない。その結果、空き家が増加し、人口が減少し続けている。必然的な帰結ともいえる。サラリーマンに代表される中間層の発生により、生活に余裕がある人が増え、彼らの需要を満たすものとして商店街が発展していった。1920～30年代に問屋街から商店街への変化が始まり、1958年にダイエーが開店、その後、マス消費が拡大していく。大店法の導入直前には、駆け込み出店が目立っていたが、その頃はショッピングセンターと商店街が共存していた。その後、商業施設の巨大化、モール化、郊外化がいっそう進み、商店街の比較優位がなくなっていく。

近年は、変化の兆しも現れ始めている。リノベーションに代表される新陳代謝の再開である。山形市では、商店街の「キワ」で活性化の兆しが見える。山形市中心市街地では、地価が下がりが続き、賃料も安くなっている。加えて、東北芸術工科大学が開学し、学生が増えたことも新陳代謝が再開した原因と考えられる。うまくこの流れを活用すれば、地価の上昇を見込めるかもしれない。しかし、問題もいくつかある。リノベーション物件の耐震性確保、リノベーションの画一性、空間の同一性などである。リノベーションが広がることで、ジェントリフィケーションのような、貧困者、高齢者を排除する問題も発生している。

なぜ消費を起点にまちがつけられなければならないのか。マス消費に依存しない、例えば、限られた時間、限られた空間で、限られた商品を消費するといった、「私」的消費が中心市街地再生につながる。住む、学ぶ、楽しむ、働くなどが混在した場所がまちである。消費だけではない。暮らしと労働の再編の先端にある場所が中心市街地である。

・第二部:パネルディスカッション「これからの中心市街地を考える」

渡辺(徳島大学助教)より、話題提供として、「賑わいの変遷からみた徳島市中心市街地の分析」と題する報告が行われた。徳島市中心市街地の人口、従業者、地価、施設の位置などといった基礎的データを基に、中心市街地から賑わいが減少していること、徳島市中心市街地の商業に関する行政計画を整理することで、どのような構想がどのエリアで議論されていたのか、最後に、GISデータを用いた都市構造分析の結果が示された。分析結果から、徳島市中心市街地の賑わいは減少しているものの、賑わいを作り出す可能性は存在していることが分かった。

これを踏まえ、「これからの中心市街地を考える」パネルディスカッションが行われた。パネラーは、貞包氏、渡辺に加え、豊田哲也氏(徳島大学教授)、長谷川晋理氏(びざん大学理事長)、司会は小川宏樹氏(徳島大学教授)である。

豊田氏からは、地方都市、特に人口20万程度の県庁所在都市が、地方の衰退を食い止めるダムとなり得るか、という観点で検討した結果が示された。具体的には、徳島市の産業、雇用、都市機能がどのように変化してきたのか。東京一極集中に抵抗できる力が残っているのか。人口流動パターンはどのように変化しているのか、である。

職業別の構成比を見ると、徳島市は専門的、技術的な職種が多い。2時点を比較すると、もともと持っていた強みが平準化されている。社会が成熟するにつれ、産業構造が変わっていることがその原因である。昔は都市の個性がはっきりしていたが、福祉や医療などに雇用が移っていくと、どこの都市も似たようなパターンとなる。産業別にみると、徳島市は、農業、医療福祉、公務が多く、製造業、金融が少ない。事業所の数と、本所・支所の関係を見ると、地元資本が減り、首都圏の割合が伸びている。京阪神の地盤沈下が地方都市の資本関係にも表れている。地域の経済が東京に吸い上げられていることがわかる。

人口の動きを見ると、高松市は他の四国3県から転入する人が多い。松山市は愛媛県内からの転入が多く、高知市、徳島市は県内から転入し、三大都市圏への転出が多い。高松市、松山市は経済規模が大きいこともあり、人口流出を食い止めるダムになっている。時系列の人口統計を見ると、徳島市は県内から徳島市へ転入する人口が多く、社会増になっている。しかし、県外へ転出する人も多く、プラスマイナス0になっている。流入人口と同程度の流出人口があり、ダムというよりは、ポンプとなっている。県内の人口移動パターンを見ると、吉野川北部の町では、徳島市から住宅購入等をきっかけに転出する人が多かったが、最近ではプラスマイナス0になっている。一方、南部の小松島市、阿南市では、2010年を契機に転入が増えている。津波災害への警戒感と考えられる。

長谷川氏からは、びざん大学の活動が報告された。本業はテラス店の経営だが、NPOの活動として、まちなかに花を植える活動、国際ボランティアの受け入れ、シェアハウスの運営に力を入れている。いろいろな小さな活動にアイデアを付加させて、それを多方面に展開している。商店街で新しいことをやるのは難しい。そのため、商店街から一本裏に入った通りで新しいことが始まる傾向にある。東新町商店街をどうすれば活性化できるのか、迷いながら活動している。

ここからパネラー、会場も含めて自由討議となった。話題になったキーワードを挙げると、中心市街地活性化=商業ではない、多様性を排除せず寛容性のあるまちが重要。住民のニーズ、心理を分析する



必要性。住むところ、稼ぐところの一体化。暮らしやすさと商業の賑わいの関係。モビリティと都市構造との関係。健康と都市の魅力。建築家の夢。災害の観点からみたまちなか居住と郊外化など、パネラー、会場が一緒になって、さまざまな観点から議論が行われ、最後に佐藤昌平氏(日本建築学会四国支部長)の挨拶が行われて閉会となった。

今回のシンポジウムでは、貞包氏からは消費の視点、渡辺より都市構造の視点、豊田氏からは産業、雇用、都市機能の視点、長谷川氏からは実践者の視点から中心市街地について語っていただいた。その後の議論でも、モビリティ、防災、建築など、いろいろな視点が出された。中心市街地の問題が全国各地で発生しており、決め手となる解決策も見出せていないなか、今回のシンポジウムでも、結論は出なかった。しかし、佐藤氏の最後の挨拶にて指摘されていたとおり、地方都市にはそのまちなか独自の特徴があり、例えば徳島市中心市街地であれば、川、眉山、城山といった地形的特徴に加え、阿波踊りやマチアソビ、寺町など歴史文化、そして徳島で暮らす人々などであろうが、それらを活かしたまちづくりが求められる。大きな視点で人や物の流れを見ながら、徳島の空間的、文化的資源を大切にしつつ、さまざまな場所で起こる小さな活動を多方面に展開させ、商業だけでなく、暮らし、学び、楽しみ、働くことができるまちを目指すこと。よく考えると、当たり前のような気もするが、建築や都市を考えるうえで、忘れないようにしたい。



貞包英之氏の講演

パネル・ディスカッションの様子

[渡辺公次郎/徳島大学助教]

## ●九州支部

### 「八女福島—町家再生とまちづくりの『技』を訪ねる」

日本建築学会福岡支所の担当により、「八女福島—町家再生とまちづくりの『技』を訪ねる」と題し、八女福島の町家再生やまちづくりを支える技術と仕組みについて、関係者の講演、まち歩き、意見交換を10月13日(土)10時～16時に行った。再生された旧八女郡役所を会場に、一般市民や建築関係者20名の参加があった。

八女福島は、近世期の町の骨格を残すとともに、江戸末期以降に普及した塗屋造の町家が連続して町並みを形成している。その歴史的価値の高さから重要伝統的建造物群保存地区に選定され、また、官民協働での町家の再生・活用やまちづくりの長年の取り組みから、町並み保存の先進地として高く評価されている。地方小都市で、人口減少による空き家の増加問題を抱えながらも、着実な成果を上げている。

当日は、この取り組みを主導されてきた北島力氏(まちづくりネット八女、八女空き家再生応援団)と中島孝行氏(八女町並みデザイン研究会)、また、若手で新たな再生手法に取り組まれている高橋康太郎氏(八女空き家再生スイッチ)を講師にお招きし、加藤浩司氏(有明工業高等専門

学校准教授)がコーディネーターとして進行した。

まず、北島氏から「空き家再生事業のしくみについて」、中島氏から「町家の再生技術について」の講演をいただいた後、参加者が2班に分かれ、北島氏と中島氏の案内で八女福島の町並みと町家再生事例の見学を行った。続いて、新たな取り組みの動きについて、加藤氏から「八女福島に住んでみて」、高橋氏から「旧八女郡役所での取り組みについて」の報告をいただいた。これらを踏まえ、最後に意見交換を行い、「伝建地区外の町家再生の課題」、「リノベーションの連鎖・波及」等が話題となった。晴天にも恵まれ、充実した6時間であった。

加えて当事業では、八女空き家再生スイッチと有明工業高等専門学校加藤研究室の共同制作によるガイドマップ「八女福島 福岡マップ」を発行した。旧八女郡役所で配布しているので、見学の折にはぜひ手に取っていただきたい。



講演の様子

まち歩きの様子

[志賀勉/日本建築学会九州支部福岡支所]